

令和8年度 一般選抜前期日程 人間健康科学部看護学科 小論文
出題の意図と解答の傾向

第1問

【出題の意図】

看護学科のアドミッションポリシーとして「人に関心があり、他者と尊重し合う価値観を備えている」、「柔軟な発想で分析し、論理的思考に基づいて論述できる」を挙げている。これらを測るために、長期入院の後に自宅に戻った患者やその家族が、訪問看護師の関わりにより変わっていく事例を課題文に用いた。

この課題文を通して、①患者本人や家族、患者らを支える看護職それぞれの立場から、住み慣れた場所で営まれる「日々の暮らし」を具体的に想像する、②人間の基本的欲求の一つである「清潔」が損なわれることにより日常生活にどのような支障が生じるかを自身の経験に照らして捉える、という点を測ることを意図して出題した。そして、人の尊厳を守り、その人らしい生活を維持するために必要な支援の在り方を自分の言葉で論じているかを問う設問とした。

【解答の傾向】

設問1

受験生の多くは、住み慣れた環境がもたらす意義について、自身の経験を交えながら多角的に述べる事ができていた。具体的には、自由で安心・安全な空間が確保されることによる心理的効果や、家族・友人・近隣住民との交流による心身のサポートなど、在宅ならではの意義が挙げられていた。一方で、課題文の引用に頼り、療養者の実際の「暮らし」を具体的に想像して言及できていない解答が見受けられた。単なる制度や環境の説明に留まらず、そこで営まれる個々の生き方にまで想いをめぐらせることが、理解を深めることにつながると言える。

設問2

本設問では、清潔に関する自身の考えを論述するにあたり、日常生活への影響について自らの経験やこれまでに得た知見を交え、具体的に論じることを求めた。清潔行動は、地域の文化や家族固有の習慣、個人の嗜好に強く影響される。そのため、日常生活への影響を考察する際は、身体面・心理面・環境面・社会面といった多角的な視点を持つことが欠かせない。受験生の多くは、これらの側面のいずれかに着目し、自身の見解を論じている事ができていた。

清潔の保持に関する考察では、自身や家族の清潔が損なわれることによる影響に触れる解答が目立った。一方で、清潔を保持できない要因を、看護師をはじめとした「支援側の人材不足」という構造的課題に求め、その解決策としてAIやロボットの活用による業務効率化や患者と向き合う時間を生み出す手段の確保を提案する解答も見られた。このように、単なる個人の習慣に留まらず、社会的な背景やテクノロジーの活用まで視野を広げ、多様な角度から清潔の意義を捉えようとする傾向が見られた。

解答の構成に関しては、多くは序論・本論・結論を意識して記述できていたが、相互の関連性が一部不明確なものが見られた。また、受験生の一部には、文字数が8割に満たない、誤字脱字、不適切な文章表現により減点されたものが見受けられた。

第2問

設問1

【出題の意図】

図1と図2を統合し変化を読み取り、いじめや不登校といった児童生徒指導上の課題と社会的背景と関連づけて説明する力を問う。図をもとに客観的な事実を把握し、単に現象を並列的に述べるのではなく、複数の事象を比較・統合しそこから予測される課題と、それに共通する社会的要因（家庭環境、地域の人間関係、情報社会の影響など）を推測することで、社会的現象を根拠をもって考察する姿勢を評価する。この設問を通して、アドミッションポリシー②（基礎的学力と科学的思考力）に基づき、資料から課題を正確に把握する力、アドミッションポリシー③（柔軟な分析と論理的思考力）に基づき、複数の要因を関連づけて説明する力、アドミッションポリシー①（他者への関心と尊重）に基づき、数値の背後にある子どもや家庭の状況を理解しようとする姿勢を評価する。

【解答の傾向】

図1と図2から小学生と中学生を比較し違いを読み取っている解答が多くみられた。図1と2を統合した課題と社会的要因を導く回答があった。SNSといじめを関連づけた支援が多く述べられていた。

設問2

【出題の意図】

令和2年前後に見られるいじめや不登校の変化に焦点を当て、社会的背景を踏まえて今後の支援の方向を考察する力を問う。社会状況の変化（感染症の拡大、生活環境の変容、人との関わりの希薄化など）が、子どもたちに及ぼす影響を読み解き、そこから支援の必要性を論理的に導き出すことを通じて、人を理解し支える視点を評価する。この設問は、設問1で得た現象理解を発展させ、具体的な支援への応用力をみる構成とした。この設問を通して、アドミッションポリシー①（他者と尊重し合う価値観）に基づき、子どもや家庭の立場に寄り添う姿勢、アドミッションポリシー③（論理的思考と柔軟な発想）に基づき、社会的変化の要因を多面的に分析する力、アドミッションポリシー④（社会貢献の意思）に基づき、支援や連携のあり方を自分の言葉で構想する力を評価する。

【解答の傾向】

図1と図2から小学生と中学生を比較し違いを読み取っている解答がみられた。一方、図1のいじめの認知件数は長期的に増加傾向にあり、令和2年に一時的な減少から再び増加に転じ、その時期から図2の不登校児童生徒数も増加傾向にあるという解答があった。コロナ禍にSNSが普及したことによるいじめの増加と不登校を関連させて支援を述べている解答が多かった。図1と図2からコロナ禍による休校により対面接触が減り、いじめが確認されにくくなったこと、生活リズムの乱れ、人間関係の不安などの共通の課題を記述している解答があった。学校内にとどまらず、地域、家族関係にまで広げて居場所づくりの必要性を述べている解答があった。